

< 12 月図書館資料展示 >

於：人文科学系図書館

ワーグマン『日本素描集』、ちりめん本（Crepe Paper Book）

明治の日本土産

チャールズ・ワーグマン（Charles Wirgman）は英国に生まれパリで絵画を学んだとされるが、挿絵に本領を発揮し、維新前後の日本の諸相を旺盛な好奇心で描いたスケッチを残している。来日翌年に創刊した『ジャパン・パンチ』誌の挿絵と記事には、英国人らしい風刺が効いている。文久3年（1863）には写真家フェリチェ・ベアトと共同で「ベアト・アンド・ワーグマン商会」を設立、慶応3年（1867）まで西洋人相手に絵や写真を量産して売ったもようである。今回展示される横浜ミクルジョン社発行の *A Sketch Book of Japan* は日本の風俗を紹介する小冊子（推定1884年発行）で、ワーグマンの挿絵はベアトの写真に構図が似たものがある。外国人の目に映った幕末明治の日本の姿が興味深い。

同じく外国人に珍重されたのが英語やフランス語などの文章に日本画の挿絵を添えた「ちりめん本」で、東京の長谷川弘文社が「日本昔噺」シリーズの翻訳出版に成功した。ほかに明治の風俗を紹介する挿絵に暦を配したカレンダー・シリーズなども製造販売している。木版画を加工して縮めた「ちりめん本」と縮めていない「平紙本」とあわせて広義の「ちりめん本」(crepe paper books) と呼ばれる。この珠玉の絵本の多くは明治時代に日本を色鮮やかに世界に伝える役割を果たし、各国の図書館や美術館に収められている。

異文化コミュニケーション学部教授 山田久美子

ワーグマン『日本素描集』 *A Sketch Book of Japan* / by C. Wirgman より



ちりめん本 (Japanese pictures of Japanese life / 長谷川武次郎著ほか)



< 展示図書 >

1. A Sketch book of Japan / by C. Wirgman (横浜 []年)
2. The Old man who made the dead trees blossom / ダビッドタムソン訳述
(東京: Kobunsha, 明治 19 年[1886])
3. Hanasaka Jiji / ダビッドタムソン訳述 (東京: Kobunsha, 明治 18 年[1885])
4. Japanese topsyturvydom / by E.S. Patton (東京: T. Hasegawa, 明治 29 年[1896])
5. 頭山: 縮緬絵本 / 山村浩二絵・文 (東京: エス・ビー・ビー, 2006)

< ワーグマンとは? >

イギリスの画家, 新聞記者。1832 年 8 月 31 日生まれ。もと陸軍大尉。文久元年(1861)来日。小沢カネと結婚して横浜にすむ。「イラストレーテッド-ロンドン-ニュース」特派員として、生麦(なまむぎ)事件、薩英戦争などを絵と記事にした。文久 2-明治 20 年風俗風刺漫画誌「ジャパン・パンチ」を発行。また高橋由一らに洋画を教えた。明治 24 年 2 月 8 日横浜で死去。58 歳。ロンドン出身。(日本人名大辞典より)

【参考図書】

1. The genius of Mr. Punch : Mr.パンチの天才的偉業: チャールズ・ワーグマンとジャパン・パンチが語る横浜外国人居留地の生活, 1862-1887 / 山下仁美, Rogala, Jozef
(Yokohama, Yurindo 2004)
2. 舶来文化 / ワーグマン[絵]: 芳賀徹ほか編 (東京: 岩波書店, 2002)
3. ワーグマン日本素描集 / 清水勲編 (岩波文庫, 東京: 岩波書店, 1987)
4. チャールズ・ワーグマン作品目録 / 神奈川県立博物館編 (横浜, 1993)
その他にも、本学図書館に多数所蔵。

< 縮緬(ちりめん)本とは? >

主に明治時代中期から昭和初期まで流行した、木版手摺りの和本。和紙をちりめん状に加工した後に挿絵や文章を印刷したように見えるが、あらかじめ印刷した和紙を手工芸用の「クレープ・ペーパー」のように縮緬(ちりめん)状に加工してから製本したものである。

日本橋生まれの明治の出版人「長谷川武次郎」(1853-1938)によって「桃太郎」や「舌切り雀」など多くの昔話などが出版された。

【参考図書】

1. ちりめん本のすべて: 明治期の欧文挿絵本 / 石澤小夜子著 (東京: 三弥井書店 2004)
2. 文明開化のちりめん本と浮世絵: 京都外国語大学創立 60 周年記念稀覯本展示会 /
(京都: 京都外国語大学附属図書館 2007)
3. ちりめん本: 放送大学附属図書館所蔵目録: 長谷川武次郎とちりめん本の歴史 / アン・ヘリング (千葉: 放送大学附属図書館 2001) など